

前 書 き

本学紀要「北星論集」第2号は昨年春出版される筈であった。文学部長から専任の大学々長に就任された鷲山先生がすでに古稀のよわいを越えておられたので、その記念の意味をも含めて出版したいと教授会の多くのスタッフは念願していた。しかし、昨年6月から、にわかには経済学部新設の作業に大多数が没頭せざるを得なかったため、本論集の出版が今日まで延び延びになった。

今年春新校舎の一部、礼拝堂、図書館が完成した時、遅ればせながら本号を出版する運びになったので、鷲山先生の御略歴を次ぎに掲げて、編集者の前書きの言葉とする。（編集者）

生いたちの不思議

万延元年3月3日の桜田門外井伊直弼の刃傷事件は折角に開国論に傾いていた幕府の方針を一変して尊王攘夷の勢力が単に幕府のみか全天下を制圧してしまった。紀州新宮の藩主水野忠央は当時井伊大老の側近にあって開国論の補佐役であり、その水野公の祐筆古田直三郎はこれまた進歩主義の精鋭として絶えず君公の意を捧じて世論の革新に参画した。果然直弼の横死とともに開国論の諸藩には謹慎、進歩主義の志士達は拘束投獄の非運に遭った。

古田直三郎は実は私の祖父である。君公水野忠央への隠居仰付があると同時に古田の家には閉門という憂目が到来した。その幽閉の惨めさは想い半であったと幼時私は母からきかされたものだ。父古田稔太郎には計画性があったようだ。家運の挽回のためか維新の奉還金を元に各種の事業を試みたが「土族の商法身代限り」の例にもれず片端から失敗して果ては債鬼に追われ新宮から5哩ばかり熊野川を溯った三津野村に移住しその地の単級小学校の教師として細々と生計を立てていた。その間の明治26年1月27日に私は誕生

した。ところが明治28年4月父は44歳で、さらに川奥の三里村の小学校で子供5人を残して亡くなった。零落の極み、一家離散は必定、最年少の当時3歳の私だけが母のもとに残されて、兄姉4人は縁者や親戚に庇護をもとめて去った。母は針仕事で私を育ててくれた。その貧しさは私の記憶に鮮やかに残っているが話したくはない。それで、かりに成長後の私が熊野川の筏流しを職とし、とうの昔にあの激湍で流材から足をこらせて溺死したとしても不思議ではない。不思議とはその孤独な貧童が幼な望みのままに「学校の先生」になり、中学校、専門学校の教師をつとめ、最後の14年間は文部教官大学教授としての榮譽を担い、古稀すぎでからは人間の滅多に授かりえない大学長、しかも尊い伝統に立つ北星学園大学長に推されたということである。

私は親戚の家で働きながら中学校に通った。沖野岩三郎先生の牧した新宮教会で洗礼をうけ、卒業後は明治学院神学部に入學させてもらった。神学校卒業の時は基督教学校の教師になりたいとの真剣な志望を井深梶之助先生に申出て学院に残して戴き、村田四郎氏（当時学院の中学部長）に抜抽されて中学部の聖書と英語の教員となった。その後シェイクスピアその他英文学に関する書物や「明治学院五十年史」等の著作によって認められ、明治学院高等学部教授に採用され、前後23年間学院内で仕事をさせて戴いた。戦争の渦巻きのうちに、一時聖心女子学院に転じ、東京への大空襲の直前私は北海道室蘭日本製鋼所の徴用工員指導という仕事で一家を北海道転居せしめた。

終戦後昭和24年室蘭工業大学創設の際は招かれて同大学の教養科人文科学の教授となり、昭和37年3月に退職、同時に新設の北星学園大学教授文学部長として就任、昭和39年5月学長に推された。

私は当年72歳となった。かえりみて、人間の生涯は神のなし給う一つの不思議であると思う。熊野川畔で戯れた貧しい一少年が、今日わが国北方文化の都市札幌でこうして生きている事を誰が想像しえたらう。私は何人をも憎みえない、というのは凡てのことが私には益であったからである。

（昭和40年5月10日）

鷺山 第三郎